

コラム <一水四見・徒然草>2025/04/03*

ブッダ (Buddha; 覚者) の「覚 (Bodhi); さとり」の内実である「縁起」について、その存在論を空観 (くうがん) といい、その認識論を唯識観という。<一水四見>は唯識観による縁起を説明する喩えの一つ。人間が水と見るものを天人は宝石でできた大地、地獄の住人は膿みで充満した河、魚は住処として認識する。同一の客観的対象が、主観の認識能力・機能・対象との利害関係等によって様々に認識されうること。

滅びゆく日本と永遠の和国

村野謙吉

2022年、今後の世界史と日本の行末にとって重要な年だ。

ロシア・英国・中国の世界的に著名な人物と、日本の2名の元総理大臣が、それぞれに歴史的意味を残して死去していった。

- ・1月9日、若き時少年飛行兵となることを目指した海部俊樹 (元内閣総理大臣) 死去。91歳。
- ・7月8日、安倍晋三 (戦後最年少となる52歳で首相に就任; 2度にわたる在任期間は歴代最長) 死去。67歳。英字紙では“暗殺” (BBC News: Shinzo Abe: Japan ex-leader assassinated while giving speech; 8 July 2022)。“暗殺”は隠蔽された政治的な背景を匂わす用語だが、安倍氏殺害に関わった人物の動機や背後関係について、説得力のある解説や事実にもとづく検証が全く行われていないから当然である。
- ・8月30日、ミハイル・ゴルバチョフ (元ソビエト連邦大統領) 死去。91歳。
- ・9月8日、エリザベス2世 (大英帝国の伝統を継ぐ英連邦の象徴的元首; 在位70年7カ月の史上最長の英国君主) 逝去。96歳。
- ・11月30日、江沢民 (元中国共産党の総書記、元国家主席) 死去。96歳。

そして2022年2月24日、ロシアによるウクライナ“侵攻”があった。(Russian aggression in Ukraine; BBC, The Timesなどの表現)。その“侵攻”状況は2025年4月の現在も続いており、一部の国の軍需産業を潤わせつつ、世界の国民生活に対しては様々な犠牲を強いている。

「戦争は軍需産業の在庫一掃セール・・・アメリカは対戦車ミサイル“ジャベリン”を5500基以上ウクライナに供与・・・地对空ミサイル“ステインガー”は1400基以上」: 【報道1930】TBSテレビ2022年6月5日(日)

ユダヤ系ゼレンスキー大統領支配下のウクライナでナチスの旗を掲げるアゾフ連隊の存在は、西欧における複雑なユダヤ問題を改めて露呈させた。



U.S. allies in Ukraine, with NATO, Azov Battalion and neo-Nazi flags. Photo by [russia-insider.com](https://www.russia-insider.com)

ウクライナ“侵攻”が、西欧文明内に温存されている対立情念にもとづく二大軍事勢力間にある一定の地域や国家を舞台にした代理戦争の様相を帯びているのは明らかである。

2025年3月現在、ロシアによるウクライナ“侵攻”はいまだに継続しており、世界各地での天災地変が加わって、これまでの西欧主導の歴史は戦争する以外に目的を失っているかのようである。

このような状況下、日本の行く末を案じる私の妄想的疑問に答えるかのように、過去の文人たちのつぶやきが聞こえてきた。

日本の行く末は？

「滅びるね」夏目漱石。

『三四郎』(1908年): 三四郎が上京する車内で出会った中年男は呟く「いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね」。三四郎「しかし、これから日本もだんだん発展するでしょう」と答える。すると男は一言「滅びるね」といった。漱石は「則天去私」の心境で1916年死去、49歳。

滅びゆく日本に生きている心境は？

「唯ぼんやりした不安」芥川龍之介。

『或旧友へ送る手記』: 「君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。」

芥川龍之介は斎藤茂吉(医師・歌人)から与えられていた睡眠薬を致死量飲んで服毒自殺。1927年死去、35歳。

日本の行く末はどのようなものか？

「うしろすがたのしぐれてゆくか」種田山頭火。

『行乞記(1931)』所収の句。1940年、享年57。

今後も郷土愛をいだかせるような愛しい日本はありつづけるのだろうか？

「マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや」寺山修司。

『われに五月を(1957)』所収。1983年5月4日、敗血症のため死去、47歳。

はたして現在の日本は、滅びつつあるのか、身捨つるほどの祖国はあるのか。

みんなが心の底で、ぼんやりした不安を抱いているのではないのか。

日本の歴史的伝統の背後がしぐれているのではないのか。

日清戦争以後、日本史上、初めて西欧の覇権政治の実態に飲み込まれて、日本の政権担当者らと彼らを取り巻く忠臣や奸臣たちは、東アジアに位置する和国日本の文明的かつ地政学的意義を深く了解もせず、西欧文明の光と陰の本質も理解しないままに、日本の未来への具体的な平和の構想も持たなかったのではないのか。

日本人のみならず(官僚と大学教員)からなる世界の知識人たちは、国家経営の核心である経世済民の志を忘れて、敵国を想定した軍備戦術に固執して政治理論を弄んで国際政治を考えていたのではないのか。

天皇陛下万歳を叫ぶ愛国者のさまざまな団体や、「天皇制」廃止論の心情を抱いている宗教団体や進歩的知識人らが、それぞれ我見に執着して、日本の滅びを促してきたのではないのか。

日本が滅びつつあるとすれば、その後の日本はどうなってゆくのか。

単なる市場として利用されるのか。

日本とはなにか、これから、どこへ行くのか。

* * *

聖徳太子の頃から明治維新まで13世紀以上にわたって伝統的和国の形成に関与してきた中華帝国の多大な文明的影響と、1945年8月15日連合国側に無条件降伏して以来、GHQに代表されるパクスアメリカナの軍事的・政治的・文化的かつキリスト教的影響の下に置かれているのが東アジアの列島国家の日本である。

古代において日本は、聖徳太子の「和」の価値観によって、中華文明を導入するにあたって、易姓革命・宦官・纏足・科举制度などの思想や習慣や制度は取り入れなかった。

聖徳太子の「十七条憲法」は、第一条に“個人の自由と組織の秩序”を保つ“人間の平等価値観”として「和」を掲げ、此岸世界（精神的支配欲と物的独占欲に支配された歴史的世界）における列島日本の国家経営に関わるすべて人々の世界観・人生観については「和」が最高の理念であると宣言する。

「和」は、インドの超歴史性の霊智（仏教）と歴史性をもった中国の叡智を享受してきた日本が、聖徳太子の大局的縁起史観をもって生み出されてきた理念である。

このような「和」の理念はイデオロギーではないから自由主義や共産思想のように世界に普及されうるものではなく、和国の価値を認識した日本人（と外国人）が日本列島において守べき「まこと」の遺産である。

第二条では、権威と権力が一体の易姓革命の政体や、西欧文明の拡大的覇権性のグローバリスト・イデオロギーを排除して、「和」を担保する理念・教理として仏教を掲げ、姓のない皇室なる文化的伝統の基礎を確定している。

「仏教」が第二条におかれていている深慮に注意すべきで「和国」は宗教国家ではない。仏教は歴史性を超えた善悪の彼岸の教えとして是認されている。これが和国の政教分離の真義である。

しかし現代世界の快適な文化生活を支えている西欧技術文明の良質の要素と、同時に深い覇権性の歴史的性格とを十分理解しないまま、明治維新时期に聖徳太子「十七条憲法」から“憲法”と、さらに“帝国”の語句を安易に取り入れて「大日本帝国憲法」が作成された。

「十七条憲法」は法律文ではない。「大日本帝国憲法」は内容自体の問題もあるが、せめて「大日本国 国法」とすべきであった。「国法」なら時代の要請において国法の改正もあるのは当然であるが、「いつくしきのり（憲法）」は「国法」の上位にある普遍的理念であるから改正はあってはならないだろう。

明治維新に短期間西欧に調査に行っただけの元勳や英才たちは、西欧文明の光と闇の深層などわかるはずもなく、西欧植民地政策の根底にある支配情念の暗部を理解することなどできなかったのは当然である。

そして明治維新の過程において「皇室の伝統」は、権威と権力が集約された「天皇制」として行政体制に組み入れられて1945年の終戦にいたった。

だからといって命がけで働いた彼らの行動を全面的に否定することなどだれにもできないが、「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」（『論語・学而篇』）

問題は、数百年にわたって地球的規模で世界を植民地化した大英帝国の下におこなわれた様々な膨大な非行について帝国の権威の頂点にある英王室は責任を取らされることはないが、敗戦後に日本の皇室を預かる天皇に対しては一部の影響力のある日本の知識人らが責任問題を指摘したことだ。

そして現在、パクスシニカとパクスアメリカナの巨大な文明的価値観の相克が日本の政権の深いところでも熾烈に展開し、明治維新まで維持されていた祖国の伝統的価値観に関わるなにかが、ぼんやりした不安の中で減びてゆくように見える。

* * *

2025年3月31日、私は和国誕生の歴史の実態を感得するために、大阪府太子町の聖徳太子の御廟を訪ねた。古寺が連なる京都から奈良へ行けば、京都の古寺が新しく感じられるように、大阪府の太子町は奈良の寺院が新しく感じられるくらいの静かな佇まいの小さな町である。

太子町は古代の和国を偲ばせるような素朴な地域であり、地元の人は推古天皇を「推古さん」と親しく呼んでいる。境内を一巡して至る所に日本の素朴な美意識と「モノのあわれ」の祖型が感じられる。



聖徳皇太子磯長御廟（写真は筆者撮影）



聖徳太子御廟・宮内庁管轄



ここでは、不規則に柔らかい大地に佇んでいる庶民の先祖を祀る様々の形の墓石がさりげなく同居しており、全体が自ずから神社以前の素朴な惟神の道を示しているかのようだ。

神と仏は、全く意味の範疇が異なり対立とか不和合の関係にないものが、なぜ対立するようになったのか。明治維新の神仏分離・廃仏毀釈のイデオロギーは誰が仕掛けたのか、和国の破壊行為ではなかったのか。

かつてフィンランド北端の町イナリからスペイン最南端のジブラルタルまで欧州を鉄道で旅したが、緑を拒絶したかのような石畳の都市に建てられた石造りの教会と、日本の柔らかい土の上に木々や草に囲まれて佇む木造の寺院との違いに改めて気付かされた。

聖徳太子御廟の前でしばし佇んでいると、1300年前も、同じような優しい空気が流れていたのではないかと思えてきた。なんとも言いようもない懐かしい和国・日本の土に触れたようで涙が出てきた。

* * *

夏目漱石の「滅びるね」の信ぴょう性は現在どうなのか。
彼が意味した日本歴史の本質とは何なのか。その本質が滅びつつあるのか。

戦争も、医療も、慈善活動も、政治活動も、人生の目的も、すべて金融主導の価値観で支配されているが如き世界に生きて、今回、古代和国の心の原風景に触れたことで、日本が滅びるということの意味がどうということなのか、様々な思いや妄想が湧いてきた。

現在、成人間において女性に対する男性のパワハラ・セクハラが世界各地で蔓延しているが、特におぞましいことは、インターネットで頻繁に暴露されている欧米における幼女に対する性的虐待である。虐待する側は慈善と偽善がごちゃ混ぜになった感覚の著名人やエリートの知識人（政治家と知識人と聖職者）である。

聖徳太子は「世間は虚偽」と洞察した。「世間」とは歴史的世界のことである。その太子を「和国の教主」と敬愛する親鸞が喝破したように、一部の特権的エリートらは、古代国家に生産業や販売に従事しない官僚制が誕生して以来、政治責任を負わない偽善に誘惑された知識人たちではなかったのか。

当時の仏教界において智者の筆頭の一人にみなされていた法然は自ら愚者の自覚の重要性を指摘して知識人に対して批判の眼差しを持っていたが、彼と彼の弟子たち親鸞を含む7名の流刑、4名の斬首刑は当時の知識人である奈良の高位の僧侶と司法官僚による不当判決であった。

* * *

「十七条憲法」は、日本列島における当時の様々な部族を統合して一民族国家となすべき歴史的状況が整い、官僚制と税務制が体制化された時期に、「おほ（大）み（御）・たから（宝）」である「国民」に奉仕する責任を持つ公僕のための戒めとして英邁なる聖徳太子によって編まれたものだ。しかし「十七条憲法」は、家族や組織に責任を持つすべての成人や企業の経営者らの行動指針でもある。

現在世界はすべての国々において従来の倫理的価値観が内部から解体されてゆくかのような状況である。金融制度そのものは全く否定すべきことではないが、歴史的伝統にもとづく「質の価値観」を軽視した無時間性の「量の価値観」を最重要視する現世主義・利己的エリート思考に基づく金融が主導する異様な権力思想が問題である。

このような権力思想の本質を描いた現代の文学作品がオーウェルの『1984年』であるが、この作品の核心的内容について作者オーウェル自身の言葉を紹介したい。

「私の近著（『1984年』）は社会主義、すなわち私が支持するイギリス労働党に対する攻撃ではなく・・・中央集権化された経済体制 (a centralized economy) が免れ難い、共産主義とファシズムの形で部分的に実現されている様々な倒錯の開示である。私が述べているような社会が必ずしもやって来るとは思わないが・・・全体主義の様々な思考は、あらゆるところで知識人の心理 (in the minds of intellectuals) に根付いていると、私（オーウェル）は考えている。・・・本書の舞台はイギリスに置かれているが、それは英語を話す様々な人種が生来的に他の者たちより優れているのではなく、全体主義 (totalitarianism) は、もしそれに対して戦わなければ、いかなるところでも勝利するかもしれないだろうと言うことを強調するためだ。」 (New York Times Book Review, 31 July 1949)

深刻な問題は、オーウェルが指摘する全体主義の様々な思考が、実は自由を標榜する西欧の知識人の心理に根付いているという指摘だ。

そのような有史以来の異様な状況下、1300年続く「和国の教主」聖徳太子の偉業を讃える法要が、極東の日本列島の片隅において、世間の特別の注目を引くこともなく4月11日と12日叡福寺にて行われる。

(2025/04/03記; 2026/09/06改定)

* 初出【NPJ通信・連載記事】一水四見 (2025年5月7日)。

村野謙吉（本名・村石恵照）：（専門）仏教学（研究分野）日本文化、ジョージ・オーウェル。

（職歴）コラムニスト（Mainichi Daily News [英文毎日]: Kiku & Sakura 連載：1978-1983）・『Young East』（1925-1944; 1975年復刊号編集主任（ヤング・イースト協会: 会長 中村元；現在休刊）・元武蔵野大学教授。
（主要論文）「仏教の靈魂観—縁起・輪廻の主体・往生の主体をめぐる」(日本佛教學會年報; 2005)。
（海外口頭発表論文）

1. 「A Universal Idea of the Belt and Road Initiative Beyond the Civilizational Conflicts between Pax Romana and Pax Sinica」(「アジア文明対話大会」北京・2019)
2. 「The Statehood and Buddhism in Japan; The Founding of Japan as the Land of *Wa* (Freedom Peace- Harmony) by Crown Prince Shotoku」(「トルコ共和国建国100周年記念ワークショップ：アジアにおける国家経験の蓄積」イスタンブール・2023)